

クリスちゃんを幸せにしたいという妄想

粗悪品

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り。

クリスちゃんの可哀想な過去を改変しようという雑な小説。

目次

第2話	7
第1話	1

第1話

吹き抜ける風。

乾いた銃声。

流れる血。

呻く人。

もう何度も見て、見飽きた光景。

人が鉄の雨に晒され、血を撒き散らして四散する様はこの世の地獄とも表現出来るかもしれないが慣れとは恐ろしいものだ。はつきり言ってもう何も感じられない。自分は壊れてしまっている。人として大切な何かはずっと前から欠如していて、いつ亡くしたのかも分からない。

その場から動く気にもなれず、ベンチに腰を落としたままため息を吐く。誰もが狂乱に急ぐなか1人だけ緩慢な時間を生きている。ゆったりとした流れに身を任せてそこに在る。ただ何もしないのは自殺だし、自分の仕事もあるので緩慢な所作で立ち上がる。

脇に置いていたケースを開いて、仕事道具の一つを取り出した。いつも綺麗に整備してるつもりの相棒は今日も黒く鈍色の光を放っている。コンデイションは悪くないらしい。

こいつは女よりも丁重に扱ってやらないと直ぐに機嫌を損ねて、痛いしつぺ返しを喰らわせてくる。粗悪品の鉛を喰わせればこつちが痛いように吐き出し、疲労したところは換えてやらなきや壊れちまう。油も上物なら景気よく放す^話ようになる。下手なの使って錆びた日にはこつちの命を盗っていく。

どうやらこの惨劇の首謀者達がこちらに気づいたようだ。でも、もう遅いんじゃないか。今日の相棒は腹が減っているらしい。血を寄

越せだとき。

標的に銃口を向け、ブレないように保持。引き金を引くだけで撃鉄が動き、相手の頭が飛ぶ。なんて素晴らしくて、そしておぞましいモノだろう。こんなに簡単に人を殺せる。

誰かが言っていた引き金の重さは命の重さだと。笑ってしまふな、こんなに人の命は軽いのか。薄っぺらいにも程がある。だが人の命なんて吹けば散るようなものであることは確かなのだろう。

たまたま居合わせて地に倒れ、動かなくなった彼らが教えてくれる。きつと誰もが疑問に思ったのだろう。どうして自分が、なんでこんなことにと。呪っただろう、定めというものを。自分が何をした、どうして自分なんだと。

誰に尋ねたかなどは知らないが代わりに答えをやるとすれば、運が悪かった。その一言で済んでしまう。たまたまだ。犠牲になるやつなんて誰でもよかった。それが偶然お前になっただけ。

そんな雑な理由で人は死ぬ。命など所詮その程度の価値しかない。最短に最速で人を殺しながらつまらない事に思考を向けていた。今なお相棒は鉛を吐き出し、鉄の嵐がそこにある。どうやら相手の練度は低いらしい。フルオートの小銃を使ってるようだが反動制御が下手なのだろう。集弾率が残念なことになっている。弾痕の刻まれる柱で身を隠しながら応戦する。数に押し寄せて姿さえ隠さないと舐められたものだ。懐から手榴弾を取り出し、ピンを抜いて投げれば人は殺れるのだから温い仕事だ。

おそらく罵詈雑言の類いだろう、奴さん声を荒げている。悪いけどスペイン語は分からないな。

銃声は止まらない。

何か爆ぜる音が聞こえる。

1人、また1人と人が死ぬ。殺し尽くして、ようやくの終わりを迎えるまでこの暴虐は止まることはないだろう。

全部が終わって、取り出した煙草に火をつける。口に咥えて、紫煙を吐く。むせかえる血と硝煙の匂い。爆発物の使用のせいで崩れた建築物が巻き上げた土煙も酷い。パタパタとコートをはためかせて汚れを払うが上手くいかない。どうやら洗濯しなければならぬらしい。

これから依頼人に仕事の達成を報告して、次の仕事を探しにふらふらとする。その算段を立てながら煙草を吹かしていると、瓦礫を踏んだ音が聞こえた。

なんだ、まだ残っていたか。

血を啜って満足したのか、働く気が失せた相棒は調子が微妙になっていた。懐のホルスターに手を伸ばし、拳銃を取り出す。

相手が動く気配はない。こちらの出方を窺っているのか、それとも誘っているのか。どちらにせよ、仕事も終わったのに何時までもこんなところに居たくはない。手早く終わらせようと標的が潜む柱の裏と突貫する。

敵が銃を構えていたとしても撃つよりも速く相手を殴れるだろう。本当はお勧めできないが、銃はそこそこの重量がある鉄塊だ。殴るのに使えばそこそこの威力がでる。近接格闘でこちらを上回るならお仕上げだが。

だが、果たしてそこにいたのは厳ついアウトローでも、武装したトローローでもなくて。

普段から敵の持ち物などを強奪している。死体漁りは感心なことではないが、破損していない銃など裏マーケットに流せば金になる。正規の手続きによって登録されていない銃はいくらでも需要がある。今回もまためぼしいモノは回収し終えた。だが、珍しい拾い物をしてしまった。

自分の少し後ろをついて歩く小さな影に目を向ける。
少女など拾ったのは初めてだ。

結論から言えば柱の影にあったのは年端もいかない少女だった。ボロくなっているが如何にも育ちのよさそうな仕立てのいい服に、綺麗な銀髪、恐怖に震え、涙で顔がグシャグシャでなければ愛らしいも

のなのだろう。

彼女は銃口を向けると声にならない悲鳴を上げ、蹲った。もう何もかもぐちゃぐちゃになっていて理解が及んでいないのだろう。分かっているのは自分がいつ死んでもおかしくないということくらいか。

普通ならば優しく声をかけ、涙を拭いてあげるのだろう。だが、ここは迷子センターじゃないのだ。取り敢えずこちらに何かをする様子が無いのを確認し、服を剥ぐ。かつて怪我人を装って自爆特攻してきた奴がいた。その時はそこそこに痛い目をみた。同じ轍を踏む気はない。無情であろうと、非道であろうとこの少女が敵でないことを確認しなければならぬ。

まあ、杞憂であつた。

爆弾の類いを所持してるわけでなし、それはおろか銃も持っていない。こちらの安全を確保するためとはいえ、多少の罪悪感が沸いた。

スペイン語を話すなら困るなど、拳銃をしまいながら声をかける。自分は英語しか使えない。だが、運が良かった。彼女もどうやら英語が話せるらしい。

完全に此方を危険な存在と判じて怯える彼女は蹲るばかりで質問にも答えず、半狂乱。対応が面倒になり、もうこのまま放っておくかと思ひ始めた頃。ようやく落ち着いたのか、此方の問いに答えた。

名前はと聞けばクリスと返ってくる。なんでこんなところにいる、パとママに連れられて。なら親はどうした？死んだ。

なるほど、この少女もまた運が悪かつたわけだ。

こんな所に来たから親も殺され、自分も酷い目にあつている。多少は同情してやるつもりが、戸惑つた。可哀想に、ご両親も残念だったなど声をかけてやれば、返つてきたのは両親への怨み辛みだった。こんなところに連れてこなければ自分はこんな目には合わなかつたと。

いや、不謹慎だが笑つてしまった。

強いのか、それとも精神安定の為の逃避が上手いのか。普通はこの

年頃でそんな風に両親を恨めないだろう。

だが、気に入った。

面白いじゃないか、なあ。

手をさしのべた。

俺と一緒に来るか？何処に行く宛てもないんだろう？悪いが俺の行く場所なんて此処と変わらないような血溜まりだけだな。

彼女はこちらを睨んだ。

お前についてなんて行きたくない。けど、あたしはお前の言う通りで行く場所もないからついていく。

気の強いレディだな。

うるせえ、人殺し。

ほんとに怖いもの知らずなのな、お前。

第2話

少し湿った風が頬を撫でる。

雨が近いのだろうか。独特のカビ臭いような匂いが鼻腔を刺激した。ああ、嫌だ嫌だと陰鬱になりながら乾いた土を踏む。仕事をして土煙と硝煙と血に塗れたのに、最後は雨にまで降られるのか。それが人など殺して金を稼ぐ外道に対する罰だというなら仕方もないのかもしれないが。

なら百歩譲って俺は良いとして、おぶった彼女くらいには情けをかけてやって欲しいものだ。テロに巻き込まれ、両親を亡くし、拳銃九割犯罪者の何でも屋に拾われたこの子をこれ以上責めないでやってくれ。

始めは意地でも此方に気は許さんと、俺を少し離れたところから追っていたのだが次第に歩くペースが落ちていた。元々大人と子供。歩幅違って違う。それにあのドンパチの後だ、疲れていたのである。ふらふらとあちらこちらしているのを見兼ねて、背負うことにした。当然抵抗したのだが、一度背負われてしまえば黙りこくっていつの間にか夢の世界に旅立っていた。耳元ですうすうという規則正しい寝息が聞こえる。子供特有の高めの体温が背中に伝わってきた。

雨に濡れればこんな子供は簡単に風邪をひくだろうし、折角苦しい現実から休んで束の間の安息なのだ。起きてしまったら可哀想だろう。

帰り道を急ぐことにした。

次に彼女がクソつたれな現実に帰ってきたのは俺が寝泊まりしていたホテルの一室、そのソファの上だった。

本当はベッドに寝かせようしたのだが、よく考えればこんな土汚れたままで寝かせるのは如何なものかと判断した結果、ソファに転がしていた。

状況が理解出来ていないのだろう。寝ぼけ眼をこすり、あたりをキョロキョロ。パパ：ママ？と口にして、探すように再びキョロキョロ。ようやく俺を視界に収めて思い出したのだろう。緩んでいた顔が一気に強張り、威嚇するように此方を睨んだ。

夢だと思ったか？悪い夢だから寝て覚めれば何も変わらない、いつも通りだとしても？残念、夢じゃなかったな。ここがやはりクソみたいな現実だ。

……………ここは…？

俺の寝泊まりしてたホテルだ。

そう一言伝えるとやはり黙りこんで此方を警戒するように睨むばかりになってしまった。

そんな汚いままじゃ、何するのにも不便だ。とつとと清めてこい。彼女にタオルを投げ渡し、風呂を指差す。たとえ幼かろうと女。汚いままは嫌だったのか、特に文句も言わずにそちらへ入って行った。俺の横を過ぎ去りざまに睨みつけていくのも忘れずに。ご苦労なこつた。

愛らしい外見に似合わず警戒心も気も強い。まるで子犬^{パピ}だ。悪くないな、次からはそう呼ぶことにしよう。

設置されてる冷蔵庫を開き、取り出した酒をグラスに注ぎ、一気に煽る。高めのアルコールが乾いた喉を焼くような感触を残す。安いホテルの安い酒。しかもクソつたれな仕事終わりの一杯。いつも通りにクソ不味かった。これまた安そうなつまみのチーズに手を伸ば

す。味だけは濃い、なるほどアルコールを打ち消すには丁度いいか。

注いでは飲んで、つまんでを繰り返すうちにバスルームが嫌に静かな事に気付いた。

シャワーの音も聞こえなければ水の跳ねるような音もない。首を傾げて、まさか手首でも切ったかと軽く焦って扉を開く。

中を確認するとバスタブ一杯に水がはられ、そこにパピーが浸かっていた。いきなり入ってきた俺に驚いたのだろう。羞恥心からか、自らの身体を抱くように隠してこちらに罵声を浴びせてきた。

いや、お前何をしてるんだと言えば、風呂に入ってるんだろうかと返ってきた。

風呂……風呂……あれか、浴槽にお湯を沸かし暫く浸かるという東洋の文化のことか。だがここは中米、水が豊かと聞くかの地域と比べ、水も立派に金を食うのだ。そもそもそのバスタブはそういう目的で作られていない。軽くこちらの入浴を説明してやると、正しくカルチャーショックと言いたげに目を見開いていた。

まあ、やつてしまったものは仕方がないし、好きなようにすると良いと扉を閉める。

パピーは思いつきり西洋人だと思っていたのだが、違ったのだろうか。

そして暫く。お湯に浸かって茹だったパピーが出てきた。ホテルに言って用意させた子供用の簡素なワンピースを置いておいたがサイズは問題なかったらしい。

さて飯の時間だ。何が食いたい？好きに選べよ。

ルームサービスで用意できる夕食の書かれたメニューを手渡すが、少しそれとにらめっこしてパピーは答えた。

よく分からないものばかりだからお前と同じで良い。

じゃあ、肉だな。肉は良いぞ、特にお前みたいなガキがデカくなるには絶対に必要だ。野菜だなんだは二の次、そんなもんばかり食ってる奴はヒョロいもやしになるからな。お前も良い女になりたきゃ、しつかり食えよパピー。

おい、パピーってあたしのことか。

それ以外に誰がいる。

似合ってるだろ、子犬^{パピー}。ちまっこいくせに威勢が良いのと外見だけは愛らしいのは同じだろう？

納得いかなそうにこちらを睨んでいたが、意外なほど噛み付いては来なかった。てつきり嫌がって文句も出てくると思っていたが、案外気に入ったのかもしれない。

それ以降会話は続かなかったが、料理が届けばまた会話の切っ掛けも生まれる。

おまえ、下手だな。ナイフ使ったことねえのか？

うるせえ、切りにくいんだよこのナイフ。

俺は断然ミディアムレアくらいの上焼が好きなのだが、子供だしと彼女のはウェルダンにした。逆に火が通りすぎて肉が硬くなったか。ガチャガチャと食器を音立て、パピーは肉と格闘していた。

最後は諦めたのか、フォークを肉に突き刺しそのまま齧り付くというこの上なくワイルドな食べ方をしだした。豪快で、見てるこちらも気持ちがいい食いつぶりだが女がするにはどうなんだと思つたのも事実。本人はまったく気にしていないようだし、いいかと放っておいたのを後悔するのは何年も先のこと。今はそんな未来など露も知らない。

そして食事も終わり、あとは寝るだけ。

まだまだ大人が寝るには早い時間かもしれないが、生憎と既にお眠なお姫様がいる。変わらずこちらを警戒する彼女は必死に眠気を押

し殺し、口を開いた。

……あたし、おまえの名前も知らない。

あ?…:そういうや自己紹介もしてなかったな。俺は……だ。金さえ積まれりやなんでもやる九割犯罪者さ。

俺の名を聞いた彼女はちよつぴりびつくりしたようで、けどすぐに仏頂面に戻った。そしてまた終わる会話。こうしてずっと互いに二三口にするだけで会話が終わる。

ちと早いが俺も寝るかな。今日はドンパチして疲れたしな。お前も一緒に寝るか? ベッドは広いぜ?

ソファを占領し、そこで寝る気らしいパピーに声をかける。

少し考えた彼女は俺が腰掛けた方とは逆側に寝そべった。

そんなに端だと布団届かないんだが。

すると少しこちらに近寄った。

ギリギリ掛布団が届くくらいに。

心配すんなよ。共寝の相手が美女ならともかくお前みたいなガキに手エ出す趣味はねえ。

そうして夜は更けていく。

湯たんぽがわり、彼女は冷たい布団を暖めるには丁度良かった。